

2021年8月22日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「立ち帰って、生きよ」

聖書：エゼキエル書18：1～4、30～32

戦争で国は滅び、敵国の地に強制連行され、不自由と抑圧の中で生きるしかなかった人々が、どんなにか恐ろしく、苦しい生活を余儀なくされたことか。その現状を憂い人々の間では「先祖が酔いぶどうを食べれば／子孫の歯が浮く」という諺がよく語られていた。それは祖先の悪のせいで神の罰として今の不幸があるという意味である。またそこには、自分たちの今の苦しみは、自分たちのせいではないという主張があった。今の苦しみを誰かのせいにしたい思いはだれにでもあり得ること。もちろん先人たちの間違った政治により、不幸に至るということはあるが、ここでは現在の不幸を嘆くことに留まるのではなく、この状況を神はどう見ておられ、どのように導こうとされているのか？というところに視点があ

る。

主の言葉がエゼキエルに臨んだ。「お前たちはイスラエルにおいて、このことわざを二度と口にすることはしない。すべての命はわたしのものである。父の命も子の命も、同様にわたしのものである。」(18:3,4) このことは、神が先祖を恨む諺はもう二度と口にしてはいけないということであり、それは、すべての命はわたしのものだから、もし父が罪を犯しても、それは子どもの罪にはならない。父の罪は父のもの、子の罪は子のものであるということ。ゆえに今の苦しみは、先祖の犯した罪のせいではないとしている。

神はさらに、「わたしはお前たちひとりひとりをその道に従って裁く、と主なる神は言われる。悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。罪がお前たちをつまずかせないようにせよ。」(18:30) と語る。それは、一人一人が自分の責任において神のほうに向きを変えることを願っていることである。捕囚の地で希望を失っている民に、どのような場所、状況に置かれても、神が伴っていることを覚え、希望を持って生きよと言っている。

ドイツの神学者モルトマンの体験から教えられていきたい。彼はドイツ兵として戦い、敗戦し捕虜となって生きる希望を失っていた。その彼が聖書を手にした時、詩編の言葉に救われる。神は私が“生きている”ということにおいて、神は、私のそばにおられたし、そしてこれからも、おられるであろうということ、私に示して下さった。モルトマンはこの世に生きることにこう記す。…私たちは、この世に生きているゆえにイエスの十字架がある。私たちがこの世で生きるためにイエスは十字架にかかれた。私たちは、私たちの心の中に、私たちの交わりの中に、また私たちのこの地上に、聖霊の（神の）到来がある。私たちが

天に逃れたり、あの世へ逃げようとするのではなく、その心に、その交わりに、そしてこの世に対して、希望を持つ…。神は言われる「立ち帰って、生きよ」と。  
(神谷)